

## 第14号

## ● 目次 ●

巻頭言：「センター共同研究とその地域還元」	1
萬華鏡：「韓国における芸能文化受容の通時的共時的的研究」序説	2.3
Area Report [SIGNAL]：「ロシア」・「中国」・「モンゴル」	4
日本館便り	5
研究所紹介：「ロシア科学アカデミーシベリア支部の人文科学研究」	5
最近の出版物より	6
最近の共同研究会・講演会から	6
新任教官紹介	7
センター動向	7
最近の研究から：「金属学的に見た渤海忽汗城址出土の青銅帯鍔片」	8

## 巻頭言

## センター共同研究とその地域還元

東北アジア研究センター教授 磯部 彰

東北アジア研究センターでは、様々な共同研究を擁し、センター各委員会と連携して、その成果を逐次公開している。筆者は総務委員を担当する一方、共同研究である文部科学省特定領域研究「東アジア出版文化の研究」の領域代表も務める。そこで、地域研究を視野に入れた共同研究の代表の立場から、本研究活動の一端を紹介したい。

本研究が包括するエリアは広い。北はモンゴル・沿海州から、西はチベット、南はベトナム地域が対象である。その一方で、現地調査による研究は、個々の地域、個々の町や村が対象になるので、局地性の強い研究の側面ももつ。そのような広い空域と点としての地域において、出版システムが社会のあり方や文化といかに関係を持ったのか、といった点に重点を置いて取り組み、研究を進めている。

今年の3月、本研究プロジェクトの国際化を図りつつ、現地調査も兼ねて、福建省のいくつかの都市と村を訪ねた。その中の一つに、かつて文化都市の名を世界にとどろかせた町がある。建陽市である。福建の東北に位置するこの小都市は、かつては、東アジアの出版基地となり、中国文化を支え、アジアの人々に多大な恩恵を与えて来た。同時に、当地の人々には莫大な富をもたらし、それが還流して中華王朝の一端を支えていた。ところが、木版出版がすたれる以前、清朝の前半期に建陽の出版地区に異変が起り、産業基盤はすべて失われ、当地の住人は先祖の栄光とは全く縁のない貧困地区の村人となした。ここを訪れる世界の人々も、今は何もない田舎町と見て、近くの武夷山へお茶を飲みに行き、リピーターになることはない。外国人の立場からすれば、建陽市の興廃は、さして身近なことではない。しかし、出版文化研究という立場から考えると、必ずしも無関係ではない。それは、建陽市の郷村がかつては印刷基地として栄え、それに携わった人々の子孫が、なお昔のままに郷村に定住していることによる。今日、建陽市の書坊郷や麻沙鎮の人々は、先祖がいかに、富の蓄積を図って来たかをあまり知らない。時折、この地を訪れる外地の人から、明代の文化中心地の一つであったと聞き、古いものを集めて観光客相手の商売を始める、というのが現状である。もし



今は書林門ゲート以外にもない建陽市書坊郷

当地の人々が、東アジア出版文化に理解が深まれば、即、利益になる過去の遺物を持ち出す可能性が大きい。その中には、まだ所有者が気づかない明代出版業の遺物が含まれる可能性もある。出版史研究者から見れば、貴重な資料もあろう。つまり、郷民の村おこしへの意欲と文化史研究の進展は、ある面で利害関係が一致する。

そこで、我々プロジェクトチームは、国際共同研究を実施する中、中国側の研究者と協力し、かつて文化発信の地であった建陽市の書坊郷という村を、千年前の輝きとまではないかというが、少しでも文化村になるような改善に協力をしようと目論んでいる。出版史をめぐる助言や資料提供などによる協力が主である。もちろん、かつて出版で栄えた書坊郷が、極貧村のレッテルをはずすには、村人の意欲が第1条件であるとは、衆目の一致するところである。現在、この地方を見ると、福建の豊かな物産、改革開放に伴う資本の流入とインフラ整備の進行、など客観的好条件もある。中国地域社会改造計画とも言い得るこの計画は、志は高く、可能性は低く、という見通しである。しかし、それに負けじと、国際共同開発援助の一端に参画するをうたい文句に、一地域に対してではあるが、気長に研究の社会還元を果たそうと思う。

もちろん、我々研究者側からの単なる

「無償援助」ではなく、当地の人々が商売道具とするであろう「出版文化遺産」の学術利用をあてにしている「資本投資」でもある。可能であれば、書坊郷という一寒村をモデルに、文化研究による当地の文化的遺産の保存と資産化、観光資源化への提言をし、次に都市整備などのインフラ方面の提言、更に、教育や医療協力による地域改造へ、と妄想は拡がる。これは1研究プロジェクトで出来るものではなく、1大地域協力センターを作って取り組むべきものかもしれない。今後、地域研究は、単なる研究ではなく、その地域還元も考える必要も出て来よう。中国のように、今日、あまり有力な資源を持たないところでも、実は3000年の歴史というまぼろしの資産、あり余る若い人口という潜在的な「鉱脈」がある。文化研究から歴史的文化地域を実体のある存在とし、技術分野で若年層を鍛えれば、ここ建陽に閩越国の再生も夢ではない。



## 「韓国における芸能文化受容の 通時的共時的的研究」序説

東北アジア研究センター 教授

成澤 勝

★

韓国の大学に「研究教授」という制度があり、これに任じられると、教育の責任を免除され研究に専従することができる。平成13年度後半は日韓文化交流基金の支援も得て、高麗大学より客員の研究教授の職を頂いた。研究テーマは「韓国における芸能文化受容の通時的共時的的研究」。言語にしる、宗教にしる、文化は社会等人間集団を形成し、その集団の枠組みともなるが、芸能という文化（あるいはそれに付随する諸々の文化）はそうした働きをしないという仮説を追うことが最大の目的である。そして、果たしてそうであるとすれば、文化故に排他的とならざるを得ない人間集団相互間を、「融和」「共生」へと導く力もあるのではなからうか。

特にこの国を作り上げている民族においては一定の文化がその枠組みを構成してきたことは顕著であるが、しかしそうした歴史を歩み始めたのはそれほど古いことではない。おそらく7世紀末以後であろう。それ以前の、例えばこの祖系のひとつである高句麗という「国家」を見ても、700年ものあいだ確かに支配（統治）機構はあったが、境域は常に大きく変動し、また民族的には実に多様であった。北方ツングース系の他に、漢系、鮮卑、匈奴さらにはペルシャ系まで確認できる。そうした多様な人間集団にはそれぞれに、他集団の人にはなかなか入り込みにくい独自の文化があったのは当然であるが、しかし、そこを構成する社会群を超えた汎国家的文化が確認できる。外部（たとえば日本や中国南朝・隋・唐など）ではそれを以て「高句麗のもの」と見なした。すなわち楽舞（音楽文化・舞踊文化）である。人間や人間集団の枠を超え、個々の心に浸み込み、人々の間に相類する一定のパトスを形成する。後代には礼楽思想にも加速されて、楽舞は国家統一の方途としてさらに機能は認められていくが、この礼楽思想との結合はまた別の話としなければならない。

★

この、パトスの共有は現代的には楽舞にとどまらない。言語性が濃厚であったり特定のドグマに偏ったりしない限り芸能一般に言えよう。映画やアニメーション・漫画などが新たに大きな位置を占めてくる。すなわち、前述のような仮説を以て現代を見れば、芸能交流には民族間の融和・共生のために一定の有効性を求めるのではなからうか。特に現代的課題として残されているのが対日



高句麗「長川1号墳」壁画：様々な民族の顔貌や衣装等が見られる中、芸能者の姿も—AD400年頃

芸能交流である。

日本では古くから韓国歌謡を受け入れ、文化交流目的よりも、商業ベースで社会に定着している。映画等も昨今一般の劇場上映が増えてきている。一方、韓国では日本伝統芸能や芸術作品的文化は「紹介」という形で受け入れたが、民間芸能の方面では「政策の壁」が大きく立ちばばかり、なかなか大衆化し得なかった。1994年、日本大衆文化段階的解禁の方向が取られながらも開始時期は先送りされ、キムデジュン（金大中）政権が成立して1998年によりやく映画・ビデオが解禁され、漫画雑誌等が開放された。しかしこれも条件付きで、いわゆる「第1次開放」である。翌99年にはこうした条件が一部緩和され、劇場用アニメーションを除き映画が大幅に開放され、また歌謡の小規模公演場における公演が認められた。「第2次開放」である。さらに2000年6月には、18歳未満制限以外のすべての映画・劇場公開済みビデオ・国際映画祭受賞アニメが解禁され、歌謡公演も全面解禁、レコードも日本語以外すべて開放された。放送も映画放映に条件があるもののほとんど開放された。第3次開放であって、あと残されたのは日本語歌詞の媒体（レコード・CD・テープ等）販売と放送、テレビドラマ・娯楽テレビ番組、国際映画祭非受賞作アニメの上映等である。教科書問題や首相の靖国神社参拝というこの残された部分が最後の課題として棚上げにされており、全面開放問題が昨年来韓国国内で議論されてきている。韓国の日本文化開放及びそれに伴う韓国側の受容相等については2000年までに数次にわたり、諸方面から調査された例がある。最新の報告では『日本大衆文化と日韓関係』（朴順愛・土屋礼子

2002.5) が多面的なアプローチを試みているが、データが2000年までのものである。したがって、スポット的ではあっても、以下に一部を紹介する私の調査分析は最新のものといえよう。

## ★

こうした行政によるガードの状況下において、開放されつつある日本の現在の文化現象に受け手の韓国一般民衆はどのような感覚・認識を持っているのであろうか。本格的な調査が望まれるところではあるが、いまだこうしたデータは集められていない。しかし、この度の在韓研究のひとつの目標はこうしたデータの収集でもあった。折悪しく、教科書問題等による韓国側の反感が極に達していた時期でもあったため、諸方面の組織や団体からの協力はほとんど得られなかった。例えばタクシー乗車時などのように、もっぱら個人レベルでの接触の機会に意見を求めたり、あるいは放送や新聞等メディアの中から拾い集めるくらいであった。そうした中、在韓研究の協力教授であった高麗大学の徐淵昊博士の親身の力添えにより、ソウル市立紫陽高等学校の全面的協力を得ることができた。

オムジヨン（巖辰雄）校長の「どのような協力でも」ということばに甘え、事前に準備していったアンケート調査用紙の配布、生徒たちとの面接調査をお許し頂いた。アンケート調査では3年生の全クラスおよびその担任教諭の皆さんが対応してくれた。これすら実に限定された時間内での作業であり、あくまでも簡易調査の域を出るものではない。あるいは、爾後に期待される組織的総合的調査の予備作業ともいえよう。それでも、相当の結果を得ることができた。

## ★

このページでは、この調査のすべてについて論じる違はない。この調査のテーマとした中から一部分を集計・分析してみる。すなわち、まず開放された結果享受し得た日本文化の個々（文化関与者や作品等）に対して、韓国民（特に10代後半の若年層）がどのような姿勢にあるか、あるいはどのような印象を持ったか。そして第二に、関心や認識の深さは如何ようであるか、といった2点である。

調査日：2001年11月29日

調査場所：韓国ソウル市、市立紫陽高等学校

調査対象：第3学年

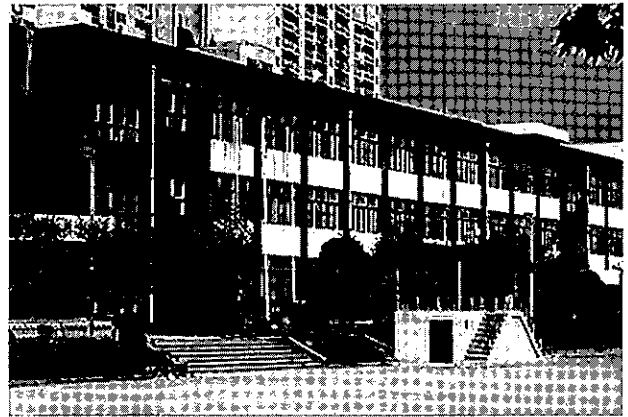
調査方法：アンケートおよび面接調査

アンケート用紙配布：410枚

アンケート用紙回収：273枚

選択肢：(a)内容までよく知っている（映画の場合見たことがある） (b)詳しくはないが知っている (c)聞いたことがある／名前程度は目にしたことがある (d)知らない

(A) この時点でソウル市内（文化の最先進地域であると同時に外国文化への反応も最も速い）の平均的高校生における、文化開放とはほとんど関連しない一般の日本若年層文化に対する認知（認識）度を見ると、よく知っていると回答のあった現象は「やまんば：1.5%」「たけのこ族：1.8%」



ソウル市立紫陽高等学校

「SMAP：4%」「モーニング娘：4%」「SPEED：10%」「アムロ（安室奈美恵）：13.2%」といった程度である。これに対して、開放された分野を見ると、まず映画では「HANA-BI：27.8%（内この映画を見たもの4.8%）」「カンゾー先生：31%（5.1%）」「鉄道員：49.8%（13.6%）」「Love Letter：67%（30.8%）」と明らかに高率になる。さらにアニメーションでも特に宮崎駿の2作品の場合「風の谷のナウシカ：40.7%（16.1%）」「もののけ姫：60%（27.1%）」（「千と千尋の神隠し」は当時未公開）と開放されたものは一挙に韓国社会に浸み込んでいく。漫画ともなると「ドラえもん」は64.5%で、中でも読んだことのある人は31.5%にのぼる。韓国の芸能産業にとっては明らかに驚異であり、さらにそれに支えられる文化分野も成長が阻害されるであろうことは容易に想像がつく。なかなか完全解放に踏み切れない韓国政府の意中もよくわかる。ただ、逆に日本文化を入れないと、競争・触発といった観点から自国の芸能文化自体が成長できないのではと危惧される面も一方ではある。面接調査では、「風の谷のナウシカ」は家族一緒に見た。父は「韓国には家族で見ることができるアニメは無いなあ」と呟いた」と答えた生徒もいた。アニメを漫画の延長と捉え、子供のおもちゃとしか認識し得なかった韓国の「おとな」支配文化は、新しい方面での文化の創造の足枷となっている面も窺えるのである。

(B) 簡単に、認識の深度についても一点のみ触れてみる。すでに述べたように「風の谷のナウシカ」「もののけ姫」はよく知られている。しかし、作者宮崎駿の認知度は22%で、こうしたアニメの作者として知っているのは8.4%に過ぎない。宮崎駿についてよく知っているが、この両作品のいずれも見なかった人は23人中3人で、ほとんどが作品を通して知ったと言えよう。また、この両作品を見た（40人）けれども作者についてよく知らない人は23人おり、作品認知が必ずしも深みを有しているとは言えない。

## ★

以上の簡略な観察からも、問題の典型が浮き彫りにされてくるし、また、一隅とはいえ、韓国における文化交流相のディテールが見えてくる。今後さらに本格的な分析の進展が求められる。



AREA REPORT

SIGNAL

ロシアから ▶ モスクワに東北大学連絡事務所が開設

6月20日(木)にモスクワ大学で、阿部総長(東北大学)とサドーヴニチ学長(モスクワ大学)が東北大学連絡事務所設立に関する覚書に調印し、同日、低温物理学科で東北大学連絡事務所の開所式が行われた。開所式には、東北大学から谷所長(流体研)、中塚工学研究科長、佐藤教授(留学生センター)、佐藤教授(東北アジア研究センター)始め14名が出席し、モスクワ大学からシドロヴィッチ教授(経済学部)、トゥルーヒン物理学部長、ストリジャック助教授(アジア・アフリカ学部)等6名が出席した。

東北大学の海外拠点としては、すでにシベリア連絡事務所(ノヴォシビルスク)が1998年に設立されているが、モスクワの連絡事務所は二つ目の海外拠点となり、東北大学はロシアに二つの拠点を築いたことになる。モスクワの拠点がノヴォシビルスクと異なるのは、東北大学がモスクワ大学に連絡事務所を構えるだけでなく、モスクワ大学も東北大学に連絡事務所を設置するという、双方向性を兼ね備えている点である。このようなケースは世界的にも稀であり、斬新な方向性を見出したと言える。モスクワ連絡事務所とシベリア連絡事務所との連携が強化されれば、効果的な国際プロジェクトを企画し易くなるだろう。今後、東北大学はロシアだけでなく、イギリス、オースト

リア、アメリカ、スウェーデンにも海外拠点を設置する予定であり、現在その準備が進められている。

(塩谷昌史)



阿部総長とサドーヴニチ学長(中央二人)

中国から ▶ 中国スポーツ事情

昨秋、広東省での文化人類学調査のために広州市に滞在した際、宿泊した市内のホテルは、ロビーの客たちもみな頑強そうな青年男女ばかりで、近頃の中国人ときたら急に体格がよくなったのか、と目を見張った。

それもそのはず、ちょうどそのころ、「第9回全国運動会」、すなわち日本の国体にあたる国内スポーツの祭典が広州市を中心に開催されており、そのホテルの泊まり客たちも、出場選手が大半であった。夜中には、突然「貴州隊啊?」(貴州代表団ですか?)と間違い電話が飛び込んでくる。「不是。我是日本隊!」(違う。日本代表団だ!)と冗談で言っていると、向こうは一瞬嘖然としていた。

次の次のオリンピックが北京に決まって以来、中国ではスポーツ振興に一層の拍車がかかり、こうした「運動会」もその準備の一環と位置づけられて、大変な熱の入れようである。街中に歓迎の横断幕がかけられ、テレビも連日競技の模様を中継しっぱなしだ。

しかし、こうしたスポーツ大会にも、中国国内の地域格差が見え隠れしている。大会に大選手団を送り込んで目覚ましい活躍をしているのは、上海、北京、遼寧、山東、江蘇、四川、それに地元の広東などの沿海先進地帯を主とする地域で、内陸の諸省の中には主要競技にエントリーさえできないところも少なくない。今回の広州のように、「運動会」の開催地となることのできるのも、開催のための経費やインフラを準備できる豊かな地域だけだという。WTOにも加盟し、先進都市地域は活況にあふれる中国だが、その国土は広く、地域間格差の問題は依然深刻である。

(瀬川昌久)

モンゴルから ▶ 国連職員遭難事故の判決

昨年1月14日、モンゴル国オブス県で雪害調査中の国連チームを乗せたロシア製ヘリコプターMI8が事故を起こし、同行したモンゴルの国会議員1名、日本の取材記者2名を含む乗客9名が犠牲となった事件で、本年5月3日、ウラーンバートルの裁判所は機長に6年、副操縦士に5年の禁固刑を言い渡した。この事故は、クルーがあらかじめ設置された着陸地点を無視して100メートル離れた窪地に無理な着陸を試み、バランスを崩して横転、火災により大破したというものである。しかし被害者側と機長双方の弁護士は、この判決が機長と操縦士にのみ罪をなすり付けているとして控訴を表明している。「モンゴリオン・メデー」紙の報道によれば、同乗の郡長が休暇中の子供を便乗させたり、通訳が禁止されたガスボンベをひそかに持ち込んだり、制限重量を超えるガスリンを客室に搭載したり、消化器具が準備されていなかったりといった、常識では考えられな

いことが行われている。また、郡では前日13日に一行が到着すると聞いて着陸地点を整地して目印の旗を立てたものの、到着しないので旗を撤去して解散してしまったという。また裁判での証言を見ると、「薄着の外国人を長い距離歩かせないよう、できるだけ(目的地の牧民家庭の)近くに降ろそう」としたのだとか、草原で火が絶えた時のためにガスボンベを持ち込んだが、搭乗の際には何の検査も受けなかったとか、はたまた着陸地点を指示する郡長に機長が訪問先の牧民の家を教えろと求め、郡長もプロの言うことだからと取って逆らわなかったなど、そもそも運航に緊張感が感じられない。被害者側の弁護士は、ヘリを運航する会社が、国会議員のフライトに平常の運航プランを採用したのは軽率だと批判しているが、要人対象の特別運航態勢をとらなければ事故が防げないとすれば、恐るべきことである。

(岡 洋樹)

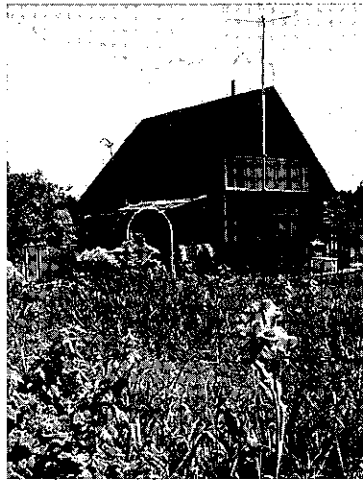
# 日本館便り

nihonkan-dayori

5月にもなるとシベリアとは言え夏の到来を思わせるような暑い日も増えます。早々と半袖に着替える人もいれば、まだ革ジャンを羽織っている人もいたり。これほど町行く人々の服装がバラエティーに富んでいる時期はないでしょう。キオスクで買ったビールやアイススクリームを食べながら散歩するカップル、流行のローラースケートで遊ぶ子供たち。ゆったりと流れる時間をそれぞれが思い思いに楽しんでいる幸せな光景です。

ところでロシア語辞典でダーチャは「避暑用の別荘」と訳されることが多いようです。実際にダーチャを見て、それが日本で一般的に想像されるような「別荘」とはちょっと違うと思っただ方もいることでしょう。ここでは多くの人が住宅地から少し離れたところに家庭菜園用の土地を持っていますが、その敷地内にある家がダーチャです。平坦なこの地で、家からバスで30分・徒歩20分で行きなり涼しい場所に辿り着けるわけもなく、時間の有効利用のためにダーチャに寝泊まりして農作業することはあっても「避暑」のために利用することはあまりありません。

先日、知り合いのダーチャに招待されました。バス停から森を抜けたところにあり、30分以上は歩いたと思います。途中ダーチャ方面から走ってくる小学生2人とすれ違いましたが、それを見た知人



招待されたダーチャです。ネギ、サラダ菜、キュウリ、ニンジンなど一般的な野菜のほとんどが栽培されていました。

はすかさず「トレーニングしているのか、何かを盗んで来たかどっちかな」とコメント。もちろん冗談ですがこんなジョークが出るようになったのは最近です。ここ数年、薬物中毒の子供たちによる金目の物を狙った冬季のダーチャ荒らしが問題になっており、あまり立派にすると狙われやすいので外見は質素にするよう人々は努めているのだそうです。歩いていると、質素どころか荒廃しているダーチャもいくつかありました。所有者が年老いて働く力がなくなったのか移住したのか。1度荒らされてその後は整備する資金もなく放置されているのかも知れません。しかし、到着したところは野菜やきれいな花だけでなく人工池やサウナまであるとても手入れされたダーチャでした。お昼は取れた野菜を使ったサラダとバーベキュー。立地条件は異なっても気持ち的にはやっぱり「別荘」と訳して正解かもと思いつつその日は楽しい時を過ごしました。

ある日曜日の夕方、アパートの外に目をやるとバスがちょうど人を降ろしているのが見えました。皆リュックを背負ってバケツを持ち、一目でダーチャ帰りだと分かります。しかし、若者が1人もいません。不思議に思いながら道路の反対側を見るとこちらは若者一色。ビール片手に優雅な散歩です。かつて「莓やべり」の頃はダーチャに食べに行くけどとは行かない」と友達が言っていたのを思い出しました。畑仕事をしない者にとっては「別荘」。辞書編纂に携わった日本人も然り。編纂に携わったロシア人はダーチャ不所持者か土いじりが好きな人達だったのかも、などと思いつつ暫く人々を眺めてしまいました。

(徳田由佳子)

## 研究所紹介

### ロシア科学アカデミーシベリア支部の人文科学研究

ロシア科学アカデミーにおける研究組織は、科学アカデミー本体が管轄している研究所群と地域ごとに設けられた各支部が管轄している研究所群とに分かれている。地域ごとの支部とはウラル支部、シベリア支部、(ロシア)極東支部の三つである。今回はノボシビルスクに本拠地をおくシベリア支部の管轄にある人文科学研究分野を紹介したい。

シベリア支部の研究組織は、科学アカデミー本体と同様に入れ子式になっている。シベリア支部は自らが直轄する研究所群をもち、さらに各地域に「研究センター」をおき、その研究センターが各地域の研究所を束ねているからである。研究センターは、ノボシビルスク、ブリヤート地区、イルクーツク地区、ケメロフ地区、クラスノヤルスク地区、オムスク地区、トムスク地区、チュメニ地区、ヤクーチア地区の9つに設置されている。シベリア支部の組織図では、理工学系の各部門に加えて、「経済学部門」と「人文科学部門」という組織がある。ノボシビルスクに設置されているシベリア支部直轄の主たる人文社会科学系研究所は、経済・産業生産組織研究所(IEOPP)、歴史研究所(II)、考古学・民族学研究所(IAET)、文献学研究所(IFL)、哲学・法学研究所(IFPR)、歴史・文献学・哲学合同研究所(OIIF)である。

ロシア科学アカデミーシベリア支部の人文科学研究は、シベリア・ロシア極東考古学ですぐれて著名な故A.P.オクラドニコフ博士の研究業績と深く結びついている。彼はチュルク・モンゴル系諸民族と北方諸民族そしてロシア人などの多民族間の歴史的交流をテーマとし、極北環境と人類の相互関係の研究の必要性を説いた。このことは人文科学と自然科学の協力を導いたのである。

こうした研究方針のもとで、考古学・民族学・文献学・言語学などが協力し文化遺産・文化伝承研究に取り組んでいる。伝統あるロシアのウラル・アルタイ言語学研究成果はシベリア支部においても継承・発展されている。とりわけ言語学・民俗学分野においてはシベリア先住諸民族の辞書編纂やレコード/CDのついたフォークロ

アシリーズ(全60巻の予定)が成果となって現れている。

シベリアは古文学上も興味深い資料がおおい。旧教徒の残した古文書や文化遺産さらに様々な伝承が見られるからである。ノボシビルスクにある国立学術・科学技術図書館(GPNTB)内のシベリア古文学センター(SATs)には2000冊以上の旧教徒に関する資料が保管されている。またブリヤート研究の進展とともに、ロシアおよびブリヤート語の国宝と言べきチベット・モンゴル関係の書籍・古文書・木版の収集・研究がされている。チベット及び仏教研究におけるシベリア学派の特徴は、シベリアにおける仏教の伝播過程と先住民文化との交流の解明に取り組む点にあるといえるだろう。

歴史研究が焦点をあてるのは、ロシア史および世界史におけるシベリアの役割と、ロシアとアジア太平洋地域双方にまたがるシベリアの地政学的な位置づけである。加えてこれまで利用が制限されてきた歴史資料をもちいた実証研究も重要である。さらに17世紀から19世紀の古文学の研究成果によって、権力と社会、自治、ロシア正教会史、旧教徒研究などの新しいテーマの開拓が精力的に進められている。考古学分野ではアルタイ山脈地域の旧石器文化の発掘が進められ、自然科学的手法をもちいた文理融合の研究が成果を挙げている。第四紀における30万年間以上に及ぶヒトと環境の関係に対する進化過程のモデル構築に成功したという。

なお、ノボシビルスクにある考古学・民族学研究所の入り口には、故オクラドニコフ博士のレリーフが貼られている。そこには、「傑出したソビエト歴史科学者であり、<社会主義労働英雄>であるアカデミー正会員オクラドニコフが1961~1981年までここで研究した」と刻み込まれている。以前この研究所を訪ねた際、私はその民族学部門でブリヤート人、アルタイ人やハカス人を調査している若い研究者と出会うことができた。彼らはそれぞれの民族・地域の歴史や文化伝承について研究を進めている。またこの研究所の図書館には『Current Anthropology』、『Central Asian Studies』等をはじめとする人類学考古学に関する英文の学術雑誌が多数そろえてあり、複数の中国語の雑誌、日本語では『考古学雑誌』が唯一所蔵されていた。複写は一枚1ルーブル(約4円)で可能であり、大変使いやすかった。なお、ロシア科学アカデミーシベリア支部との国際共同研究については下記のURLを参照されたい。

<http://www.sbras.nsc.ru/sicc/cooper00.htm>

(高倉浩樹)

## 最近の出版物より

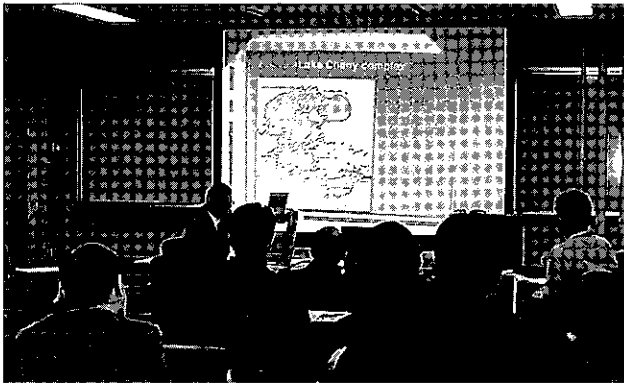
### 栗林均・確精扎布編 『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引

(東北アジア研究センター叢書 第4号)、vi+954頁、2001年12月刊行  
 『元朝秘史』は、チンギス・カーンの一代記を中心としたモンゴルの史書です。内容はチンギス・カーンの祖先から説き起こして、モンゴル帝国の第2代ハーン(皇帝)であるオゴタイの時代にまで及びますが、チンギス・カーンの生い立ちから死に至るまでの事績が韻文を交えて生き生きと語られているのが特徴です。13世紀に著されたこの書物のモンゴル語の原本は現在に至るまで発見されていません。現存するのは14世紀にモンゴル語の発音をすべて漢字の音によって記したもので、そのやり方は漢字の音で日本語を表記した「万葉仮名」にたとえることもできます。この文献は、13～14世紀のモンゴル語を研究する上で極めて重要な資料として世界の研究者の注目を集めて来ました。内蒙古大学の確精扎布教授と共編で出版した表題の書物は、ローマ字転写を原文と対照させ、そこで用いられているモンゴル語のすべての単語と名詞や動詞の語尾の索引を作成したもので、斯界の研究の一助となることを願っています。(栗林 均)

『東北アジア研究』6号、2002年3月刊行  
 ●広東省海豊島の漢族の地方文化と宗族／瀬川昌久 ●エヴェン民

族自治郡の成立とサハ共和国——シベリア・北部ヤクーチア住民の社会主義経験(英文)／高倉浩樹 ●民族区域自治法改正に見る中国民族法制の現状／上野稔弘 ●海賊船ユノナ号とアヴォシ号——ロシア側当事者の行動から見る樺太・択捉島襲撃事件／キリチェンコ アレクセイ ●1930年代初頭のソ連の対新疆政策／寺山恭輔 ●カルムイクにおけるロシア語の話し言葉と正しい言葉づかいの諸問題／エセノヴァ タマーラ ●NOAA AVHRR データを用いた北西アジア海域のエアロゾル特性のリモートセンシング：推定システムの開発(英文)／岩淵弘信・傍島明・工藤純一・浅野正二 ●東北アジア地域の分散型リモートセンシングシステムとシベリアの環境評価(英文)／イエローヒン ゲナディ・工藤純一・徳田昌則 ●中国における活火山(英文)／劉嘉麒・谷口宏充 ●中国の神話と伝説にみる天池火山の噴火(英文)／魏海泉・谷口宏充・劉若新 ●ロシア、トゥバ東北部、アザス台地の新生代アルカリ玄武岩の岩石学的特徴(英文)／リタソフ ユーリ・長谷中利昭・リタソフ コンスタンチン・ヤルモリユーク ウラジミール・スゴラコバ アミナ・レベデフ ウラジミール・佐々木実・谷口宏充 ●バイカル・リフト軸に沿う上部マントルのリソスフィア構造と熱的状态：深部捕獲岩にもとづくエビデンス(英文)／リタソフ コンスタンチン・伊藤嘉紀・リタソフ ユーリ・北風嵐・谷口宏充 ●鬼界カルデラにおけるアカホヤ噴火以降の火山活動史／前野深・宮本毅・谷口宏充 ●資料紹介『ロシア領アメリカの歴史：1732-1867年』／伊賀上菜穂・塩谷昌史・寺山恭輔

## ● 最近の共同研究会 ● 講演会から



共同研究発表会風景

◆2002年4月15日(月)13:00より、2001年度共同研究発表会が開かれた。センター共同研究は平成13年度で終了した3テーマと現在進行中の9テーマがあり、それぞれ最終成果報告と中間報告が行われた。

最終成果報告：

- ・古ツングースの生産文化に関する自然科学的再検証 (代表：成澤 勝)
- ・文化のディスプレイと伝統の再編—東北アジア地域における民族観光産業・博物館等の文化的影響力についての研究 (代表：瀬川昌久)
- ・東北アジアにおける民族移動と文化の変遷 (代表：栗林 均)

中間報告：

- ・前近代における日露交流資料の研究 (代表：平川 新)
- ・ノア・データの利用による東北アジアの環境変動解析とデータベース作成に関する学際的研究(代表：山田勝芳 報告：河野公一)
- ・中国東北部白頭山の10世紀巨大噴火とその歴史効果 (代表：谷口宏充)
- ・東アジア出版文化の研究 (代表：磯部 彰)

- ・ポスト社会主義圏における民族・地域社会の構造変動に関する人類学的研究—民族誌記述と社会モデル構築のための方法論的・比較論的考察 (代表：高倉浩樹)
- ・北アジアの環境・文化・歴史に関する総合的研究 (代表：岡 洋樹)
- ・西シベリア塩性湖チャーニー湖沼群の環境と生物群集に関する研究 (代表：菊地永祐)
- ・東北アジアにおける民族の跨境生態史の研究(代表：柳田賢二)
- ・東北アジアにおける計量地域研究のための基盤整備 (代表：宮本和明)

◆2002年5月20日(月)13:00より、講演会「カムチャツカの概要(地理、経済、生態と政治の状況) Outline on Kamchatka (geography, economy, ecology and politic situation)」が開かれ、東北アジア研究センター客員教授オクルギン教授(ロシア科学アカデミー極東支部火山研究所 鉱物学・鉱床学研究部門・研究部長)がカムチャツカの現状について講演した。

◆2002年5月30日(木)14:30より、講演会「プリヤートの宗教施設：歴史文化遺産の保存」が開かれた。スレンハンダ・ダシニマエウナ・スィルティボヴァ氏(ロシア科学アカデミー、プリヤート・モンゴル仏教チベット研究所稀観文献研究部研究員)が、プリヤートの仏教寺院の現状とその保存に関する報告を行った。

◆2002年5月31日(金)15:00より、共同研究「古ツングースの生産文化に関する自然科学的再検証」の補完編第2回が開かれ、次の報告が行われた。

- ・鄭 永振(東北アジア研究センター客員教授・延辺大学渤海史研究所長)

「渤海遺地出土銅製帯留めの金属科学的分析に向けて」

◆2002年6月17日(月)17:00より、共同研究「ポスト社会主義圏における民族・地域社会の構造変動に関する人類学的研究」の第4回研究会が開かれ、次の報告が行われた。

・藤原潤子(東北大学東北アジア研究センター機関研究員)

「ロシアの結婚儀礼の空間」

(鹿野秀一)

新任教官紹介

「新鮮な毎日」.....  
環境社会経済研究分野助手 佐藤有希也

平成14年4月1日より東北大学大学院工学研究科を中途退学し、本センターに助手として赴任しました佐藤有希也と申します。大学院を中退し、教員として働くこと自体が突然のことで驚きでしたが、本センターに赴任してからの毎日の研究生活でも驚きにあふれています。工学研究科では土木工学専攻に属し、周囲も同様の研究を行っていたの



研究室にて

に對し、本センターでは東北アジア地域に対して、様々な側面から多様な研究が行われており、新鮮な驚きを感じています。私の専門は地域計画や都市計画でありますが、現在の興味は、新しい公共事業の評価手法の確立にあります。現在の公共事業批判のなかで、公共事業に関する会計システムを見直すことにより、「本当に必要な公共事業は何なのかということ」を、住民に分かり易い形で示すことができるシステム作りを目指しております。

また、研究室全体としてのテーマであるGIS(地理情報システム)に関する研究は、東北アジア地域に関する様々な研究に対して、データベース化や研究成果の視覚的なアウトプットに非常に有用なツールであり、共同研究等で何らかの形で本センターに貢献できればと考えています。今後ともよろしく願います。

「自己紹介」.....  
研究機関研究員 藤原 潤子

はじめまして！この春から1年の任期でセンターの研究員に着任しました藤原と申します。どうぞよろしくお願い致します。大阪外国語大学に在学中、もう7年ほど前になりますがアカデムガラドク大学のノボシビルスク大学に留学していました。今回そことつながりを持つ本センターで働くことになったことに不思議なめぐり合わせを感じます。秋に出張で久しぶりにガラドクへ行けることになり、とても楽しみにしています。

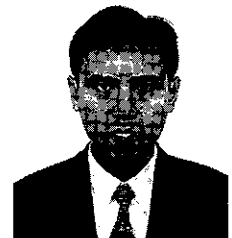
センターでは主に、江戸時代にロシアに流れ着いた日本人漂流民に関する研究に携わる予定です。と同時に私の専門であるロシア民俗研究も進めていきたいと思っております。これまで民間に伝わる昔話、民謡、呪術などをロシアの歴史的記憶の集約点としてとらえ、そこに表れている民衆の世界観について興味を持ってきました。現在、今なお多くの呪術師・魔術師が住んでいるというカレリア地方へのフィールドワークを計画中です。現代の村社会の中で彼らがどういう役割を果たしているのか、よく見てきたいと思っております。



カラドクの小さなカップル

「自己紹介」.....  
研究機関研究員 フラメット ウィチエンサン

フラメット ウィチエンサンと申します。タイの首都であるバンコク出身です。1996年にタマサート大学シリントーン国際工学研究所を卒業しました。専門は土木工学でした。そして、1998年にアジア工科大学院修士課程を修了しました。



フラメット ウィチエンサン 研究員

その後、日本文部省の研究生奨学金で日本に留学しました。1年間の研究生を経た後、東北大学大学院博士課程に入学しました。そして、2002年4月より東北アジア研究センターに講師(研究機関研究員)として勤めています。

研究分野については、地理情報システム(GIS)について興味を持っています。主として、GISに基づいて土地利用・交通モデルについて研究しています。これらのようなモデルは、都市モデル開発、都市計画、交通計画に用いられています。また、GISによる環境問題解決などの他のGISの利用についても関心があります。どうぞよろしくお願い致します。

センター動向

■ 寄附研究部門

昨年1月1日より次の寄附研究部門が設置されました。

【環境技術移転(NIKK) 寄附研究部門】

- 渡邊 之(ワタナベ,イタル) 教授:環境技術(昨年1月着任)
- 魁叶(スエー) 助手:環境政策(昨年4月着任)

■ 現在の客員研究者

本年7月～9月の東北アジア研究センターの客員研究者をご紹介します。

<客員教授>

【国内から】

- 和田春樹(ワダ,ハルキ) 教授:東京大学名誉教授・ロシア国立人文科学名誉博士、開発と社会変容の研究
- 江夏由樹(エナツ,ヨシキ) 教授:一橋大学大学院経済学研究科教授、東アジア・北アジア交流論
- 田村正行(タムラ,マサユキ) 教授:国立環境研究所上席研究官、ノアデータを利用したシベリアの環境解析

【海外から】

- 鄭 永振(テイ,エイシン) 教授:中国、延辺大学教授、渤海史研究所長、ツングース系諸族の興亡とその文明～渤海を中心に～
- KONG, Fan-Nian(コング,ファンニアン) 教授:ノルウェー、ノルウェー地球工学研究所研究員、ボアホールレーダの開発に関する研究
- KIRITCHENKO, Aleksei Alekseevich(キリチェンコ,アレクセイ・アレクセーヴィチ) 教授:ロシア、ロシア科学アカデミー・東洋学研究所南太平洋研究部門上級研究員、日露・日ソ関係に関する歴史的研究
- <客員研究員>
- 呼日勒巴特爾(フルバートル) 研究員:中国、日本学術振興会外国人特別研究員、モンゴル語音韻史の研究
- 曾 昭發(ツェン,ツォファ) 研究員:中国、吉林大学助教授、地下計測の研究
- 方 広有(ファン,グアンヨウ) 研究員:中国、中国伝播伝搬研究所教授、高精度地中レーダの開発と人道的地雷検知への応用に関する研究
- 鄭 炳説(チョン,ビョンソク) 研究員:韓国、明知大学校国語国文学科助教授、近世日本人の韓国語学習に使用された韓国古典小説
- 朴 慶洙(パク,ケンジュ) 研究員:韓国、江陵大学校人文大学日本学科副教授、仙台藩商人資本の研究 (柳田賢二)



● 最近の研究から ●

## 金属学的に見た渤海忽汗城址 出土の青銅帯鍔片

8世紀、アジアは唐の最盛期であり、北東には渤海が栄え、東では新羅が朝鮮半島を統一しており、いずれも経済的に力を蓄えていった時期である。特に唐はその建国以来交易を活性化すべく、貨幣制を整備した。まず7世紀の数次にわたる開元通宝・乾封泉宝の鑄造に続き、8世紀になると乾元重宝・大暦元宝・建中通宝と出されるが、中には史思明のような賊軍の陣からの私鑄も現れる。ために銅は非常に貴重で、常に品薄であった。奈良東大寺の大仏もこのころの製作である。また、渤海や新羅でも銅製品は多く作られ、銅の需要は高かった。そうした銅はいったいどの辺りで生産されたのであろうか。どういった技術で製錬され、そして製品化されていったのであろうか。ところが、こうした点を明らかにするためにはどうしても当代の銅製品を得て、化学的・物理学的分析が不可欠であるのに、いずれも文化財クラスであって、破壊の許されるサンプルは入手困難である。

ときに、本研究センターの渤海史蹟調査チームが2001年5月忽汗城址（現黒竜江省東京城）で現地の農民から青銅帯鍔破片を入手した。形状からして確かに古い時代の帯留めである。この農民の話ではこの地の虹鱒養魚場付近の土中から出たものという。この地はまさに忽汗城の墓地であったところで、以前から多くの研究組織によって発掘がなされてきたところである。この破片であれば破壊検査も可能である。帰国しさっそく試みた。

この試料の一部（1mm立方）を欠き、合成樹脂に埋め込み、試料を研磨及び琢磨し、鏡面仕上げをして、反射顕微鏡及びX線マイクロアナライザー（E PMA）による分析試料とした。反射顕微鏡で試料の内部と外部の組織の相違

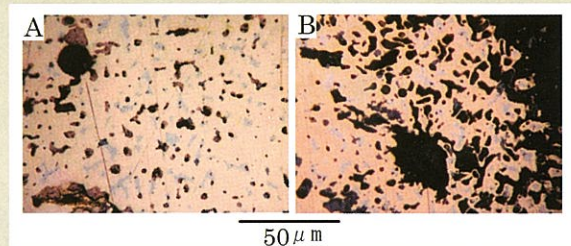


写真1. 渤海忽汗城址出土青銅帯鍔の反射顕微鏡写真  
A：試料内部、 B：試料表面

を観察した。内部の組織（写真1 A）は緻密かつ密雑で少なくとも5種の合金相が見られた。また、各合金相の相互の境界も明瞭に認識出来ないほどで、後からの腐食とか

の影響は全く認められない。しかし、内部に空孔や珪酸塩鉱物が混入すること、さらに急冷組織が認められるなど、全体的に見れば製造技術的に、まだ、未熟な状態であったと推察される。試料表面近く（写真1 B）では構成合金の種類に相違は余り違いは無いが、ある特定な合金が優先的に溶解され非常に空隙の多い組織となっており、表面近くほどその傾向は高い。このような現象は試料が長時間土中に埋没され、地下水で表面からゆっくり腐食されたと考えられる。

試料中心部付近の緻密な部分についてE PMAを用いて観察した。反射電子線像（写真2 A）では白色部分、白色で少し灰色味の部分、灰色部分及び更にそれより暗い部分など、数種の合金が密雑に組み合っていることが分かる。同じ部分をE PMAで定性分析した結果、銅、錫及び鉛が検出され、他の元素は検出限界以下であった。同部分の銅、錫及び鉛の面分析を行なった結果はそれぞれ写真2 B、2 C及び2 Dのようであった。これらの写真で赤色—黄色—青の順にその含有量は低くなっている。銅は全体的にその含有量が高いが、反射電子線像で白色部分では銅は殆んど含まれていないが、2 Dの写真に明らかなように鉛に富んでいることが分かる。錫は反射電子線像で白色で少し灰色味を部分に多く含まれ、さらに銅も周囲と同じようであることから、銅・錫の合金であることが判明した。

この出土品について出土の場所、腐食の度合い、合金組織、含有元素などから総合的に考えると恐らく渤海時代に製造されたものと推察される。今後は同時代の黄銅製造物と比較研究あるいは鉛同位体検査等により、産地の特定なども研究の焦点となろう。（北風 嵐・成澤 勝）

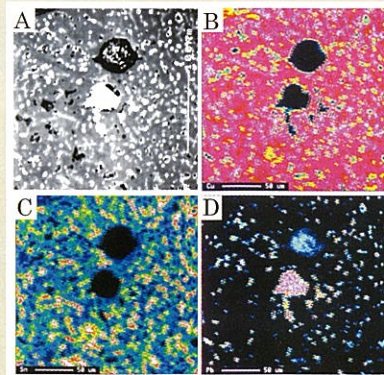


写真2. 渤海忽汗城址出土青銅帯鍔の元素分布  
A：反射電子線像、B：銅含有量の分布、  
C：錫含有量の分布、D：鉛含有量の分布

編集  
後記

今年度のニュースレター編集委員長をすることになりました。ニュースレター等の編集すらしたことがないので、編集委員長としてはどうなることか心配したが、日韓共同開催のワールドカップ期間中にもかかわらず早めに記事を書いて頂き感謝しています。（鹿野秀一）